

てきおう

No. 12

SEPTEMBER
2025

写真提供：広島県職員



第12号 温暖化による米への影響

温暖化による米への影響

暑さが米に与える影響

近年の夏の暑さは食卓に欠かせない米の生産にも大きな影響を及ぼしています。

水稻は穂が出てから20日間程度の期間（登熟期の前半）に異常な高温状態に置かれると、米の白濁（白未熟粒）が発生しやすくなることが分かっています。白未熟粒が多くなると、食味が低下し、等級・価格も下がるため農家に大きな影響を与えます。

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）によると、極端に気温が高い年や一部地域では白未熟粒の発生に加え、収穫量の減少も報告されています。

現在までの温暖化で既に影響が出ており、今後さらに気温の上昇が見込まれるため、対策を進めていく必要があります。



高温登熟耐性を持たない品種（左）と持つ品種（右）の米。左には米の白濁が多くみられる。どちらも夏季が高温だった2024年産。

（写真提供：県立総合技術研究所農業技術センター）

暑さに強い品種への転換

うるち米については、広島県内でも、特に標高100m以下の地域で栽培されている「ヒノヒカリ」で品質低下が顕在化していたため、高温による米の品質低下が発生しにくく、栽培しやすい特性を持つ「恋の予感」が南部（標高150m以下の地域）の奨励品種に採用されました。

他府県においても高温の影響を受けにくい「きぬむすめ」、「にこまる」などの高温登熟耐性品種※が奨励品種に加えられています。

※米粒が成熟していく期間の高温による悪影響を受けにくい品種。



「萌えいぶき」と試験醸造された日本酒（写真提供：県立総合技術研究所農業技術センター）

一方、日本酒原料の酒米については、県立総合技術研究所（農業技術センター、食品工業技術センター）、農研機構西日本農業研究センターなど、県内の6機関が共同研究を行い、10年の歳月をかけた品種改良によって、高温への耐性を持ち、かつ多収性の新品種「広系酒45号」を育成しました。

その米は「萌えいぶき」と命名され、令和5年度から本県の奨励品種に採用され普及が進められています。

品種改良以外の適応技術

高温登熟耐性品種の導入は温暖化に対する効果的な適応策ですが、一度に品種を転換するのは難しいため、それ以外にも水・施肥管理の最適化や、栽培時期の変更、衛星データや気象予報の利活用による稲刈り時期の適正化など、現場での適応技術も重要になっています。

